

からかい行動(teasing)に関する研究の動向と課題

牧 亮 太

(2008年10月2日受理)

A Review of Research on Teasing and Issues for the Future

Ryouta Maki

Abstract: In this paper, I reviewed research on teasing and related behaviors, and identified two components that are common to the conceptions of teasing in the previous research: provocativeness and playfulness. Therefore, I defined teasing as “a provocation accompanied by playful off-record markers”. Research on off-record markers and theory of mind has suggested that cognitive abilities of children who are targets of teasing are important for interpreting teasing. In addition, observations of mother-infant interactions implied that the interpretation of teasing depends on the relationship between a teaser and a target. With regard to contexts in which teasing behavior is likely to be taken, research on social interactions has revealed that teasing is often related with situations of norm deviations or interpersonal conflicts. Although it is not clear whether there is a causal relation, this may suggest that teasing potentially functions as controlling others' behaviors and coordinating the social relationship. However, there have been no studies that directly examined the functions of teasing in social interactions, and the connections of teasing with relationship between a teaser and a target. Because dynamic and frequent changes of peer relationship are characteristic of early childhood, attention should be paid to social interactions in early childhood, which would lead to new findings about teasing.

Key words: teasing, provocativeness, playfulness, young children

キーワード：からかい行動, 挑発性, 遊戯性, 幼児

はじめに

われわれは他者とのコミュニケーションにおいて、言語だけでなく、相手の表情、視線、ジェスチャー、声のトーンや抑揚など様々な手がかりを利用して、相手の気持ちや考えを推測しようとする。しかし、それぞれの手がかりが示す情報は必ずしも一致しているとは限らない。このように、われわれが日常的に行なっているコミュニケーションは、複数の情報から状況にふさわしいものを選択したり、ときには矛盾した情報を統合したりといった非常に複雑なシステムによって支えられている。そのため、相手の気持ちを正確に読み取るとは容易なものではなく、誤解や勘違いが生じることも珍しくない。

相手の気を引くために、あえて悪口を言ったり乱暴したりといったからかい行動(teasing)も誤解や勘違いを招きやすい行動の1つである。からかい行動は、親子、きょうだい、友だちどうし、恋人どうし、会社の上司と部下といった様々な関係において見られるやりとりであり、多様な文脈において見られる行為である。このことから、からかい行動は誰もが日常的に経験する行為であるといえる。しかし、その日常性ゆえに、これまでのからかい行動に関する研究では、対象や文脈に依存した定義が用いられており、一貫した定義は見られない。そこで本レビューでは、まず、からかい行動、およびそれに関連する研究を概観し、これまで用いられてきたからかい行動の定義に共通して見られる要素を明らかにし、からかい行動のより一般的

な定義を提示する。次に、相互作用におけるからかい行動の解釈に影響を及ぼす要因について検討し、その後、どのような文脈においてからかい行動が生じやすいのかについて分析する。そして最後に、からかい行動に関する研究の今後の展望をまとめる。

からかい行動とは？

からかい行動は、これまで心理学をはじめ人類学、社会学など様々な領域において研究がなされてきた。また、からかい行動とは他者との相互作用のなかで生じる行動であるが、親子間やきょうだい間の相互作用 (Reddy, 1991; Dunn & Brown, 1994; Miller, 1986; Schieffelin, 1986; Eisenberg, 1986; Dunn & Munn, 1985; Keltner, Young, Heerey, Oeming, & Monarch, 1998) におけるからかい行動だけでなく、友だちどうしや恋人どうしの相互作用 (Abrahams, 1962; Straehle, 1993; Keltner et al., 1998) におけるからかい行動についても研究が行われてきた。さらに、母子間の遊び場面 (Reddy, 1991)、子どものしつけ場面 (Dunn & Brown, 1994; Miller, 1986; Schieffelin, 1986)、小学校での遊び場面 (Voss, 1997)、葛藤解決場面 (Eder, 1993; Eisenberg & Garvey, 1981)、恋人どうしの会話場面 (Betcher, 1981; Hopper, Knapp, & Scott, 1981; Moore, 1995)、さらにいじめ場面 (Boulton & Hawker, 1997) など、多様な文脈でからかい行動は研究されてきた。

このように、からかい行動に関する研究は、領域、対象者、文脈において多岐に渡っている。そのため、からかい行動についても様々な定義が用いられてきた。たとえば、恋人どうしの相互作用を観察した Alberts (1992) は「からかいとは、遊戯性 (playfulness) をほめめかす表現が用いられた言語的攻撃」と定義している。また、1歳くらいの子どもと母親との相互作用を分析した Reddy (1991) は、からかいを「他者の感情に影響を与えることを目的とした意図的行為」と定義し、子どもが母親におもちゃを差し出し、母親がそれを受け取ろうと手を差し出すと、子どもはにたと笑いながらおもちゃをひっこめるといった行動を例として挙げている。このように、からかい行動に関して、言語的行動のみに触れている定義もあれば、非言語的行動のみに言及している定義もある。しかし、これらの定義はまったく異なるわけではなく、共通する要素もいくつか見られる。

その1つが、「挑発性 (provocativeness)」である。杉山 (1990) によると、挑発 (provocative) は、他者との関係で生じる問題行動の1つであり、他者の怒り

を引き出す行為であるという。挑発行為と類似した行動に攻撃行動があるが、両者は行為の目的という点で異なる。つまり、挑発行為が他者の怒りを引き出すことを目的として意図的に行なわれるのに対し、攻撃行動は相手を傷つけたり懲らしめたりすることを目的としたものであり、結果として相手を怒らせることがあっても、怒りを引き出すためになされる行為ではない。このように、行為の目的という点で攻撃行動とははっきりと区別される挑発行為であるが、他者の怒りを引き出すための手段として「つねる」、「物を投げる」などの攻撃的な形態をとることが多く、攻撃行動と同様、問題行動として扱われやすい。しかし、自閉症児の挑発行為に関する研究からは、挑発行為には問題行動以外の側面もあることが報告されている (白石, 1994)。白石 (1994) は、怒りという他者の心を理解できない自閉症児にとって、挑発行為は他者の表面的な反応を引き出そうとする結果生じる行為であり、そういった行為をする自閉症児は、他者が怒ることの意味を理解できず、むしろわくわくしてしまうと述べている。つまり、挑発行為には、怒りだけでなく他者から何らかの反応を意図的に引き出そうとする特徴があるのである。本稿では、この特徴を「挑発性」と呼ぶ。そして、他者からの何らかの反応を引き出そうとする「挑発性」があるゆえ、挑発行為はその手段として攻撃的形態をとることが多いのである。このことを考慮すると、Alberts (1992) が用いた定義の「遊戯性のある言語的攻撃」とは、攻撃行動に本来含まれている他者を傷つけようとする攻撃性ではなく、意図的に他者からの反応を引き出そうとする「挑発性」を指していると考えられる。さらに、Reddy (1991) の「他者の感情に影響を与えようとする行為」としてのからかい行動についても、他者の感情に影響を与えたかどうかを確認するには、行為の結果として何らかの反応を得る必要があるため、そこには他者からの反応を引き出そうとする「挑発性」があるといえる。

このようにからかい行動には、他者からの反応を引き出そうとする挑発性が見られるが、それは攻撃的な形態をとることが多いため、結果として他者の怒りを引き起こしやすい。しかし、そのような結果にならないよう、からかい行動の攻撃的意味合いを緩和しているのが、これまでの研究で用いられてきた定義に共通して見られる2つ目の要素、「遊戯性 (playfulness)」である。Alberts (1992) の定義には、「言語的攻撃」に「遊戯性をほめめかす表現」が伴わなければならないことが明記されている。つまり、攻撃的に見える挑発行為がからかい行動と見なされるには、遊戯的な表現が付随される必要がある。また Reddy (1991) の定義

では、「遊戯性」に関する明確な言及は見られないが、その具体的な行動のなかには、「にたっと笑う」という行為が記述されている。相手がおもちゃを受け取ろうと手を伸ばしたところで、そのおもちゃを引っこめるという行為は、本来、相手の反感を招きそうなのである。しかし、子どもは「にたっと笑う」行為を随伴させ、遊戯性を示唆することで、おもちゃを引っこめる行為の悪意性を軽減している。このように、からかい行動には、他者からの反応を引き出そうとする挑発的な要素に加え、言語的または非言語的に示唆される遊戯的な要素も重要であるといえる。

では、人はどのようにして遊戯性を伝えようとするのであろうか。社会的相互作用の分析を行った Goffman (1967, 1971)、Brown & Levinson (1987) によると、他者に提案や依頼をするとき、人は自分自身や相手の体裁 (face) を保つために、直接的な方略を避けて遠回しな行動をとり、「オフレコード・マーカ (off-record marker)」と呼ばれる方法を頻繁に用いるという。この「オフレコード・マーカ」は、たとえば、大げさな表情 (Keltner et al., 1998)、相手のまね (Morgan, 1996)、ウィンク (Eisenberg, 1986)、笑い声 (e.g., Keltner & Bonanno, 1997; Corsaro & Maynard, 1996; Drew, 1987)、語調やトーンの変化 (e.g., Straehle, 1993; Miller, 1986) などによって、行為が文字通りの意味ではなく、別の解釈も可能性であることを相手に示唆するものである (Brown & Levinson, 1987)。先述した Alberts (1992) の「遊戯性をほめかす表現」や Reddy (1991) の「にたっと笑う」行為も同様に、攻撃的に見える挑発行為が文字通りの攻撃的なものではなく、遊戯的な解釈の可能性を示唆している点で「オフレコード・マーカ」の一種といえる。このことから、からかい行動とは、他者の反応を引き出そうとする挑発性と「オフレコード・マーカ」によって示唆された遊戯性とが混在した行為であるといえる。つまり、からかい行動とは「遊戯的なオフレコード・マーカを伴った挑発行為」と定義することができる。そして、からかい行動は、挑発行為自体の攻撃的意味合いを遊戯的なオフレコード・マーカによって緩和するという特徴から、いつも遊戯的に解釈されるとは限らず、攻撃的に解釈される可能性も多分に含んでいる。この特徴は「多義性 (ambiguity)」と呼ばれ、からかい行動の重要な要素の 1 つと考えられている (Shapiro, Baumeister, & Kessler, 1991)。しかし、多義性は、からかい行動の挑発性と遊戯性によって生じる特徴であるため、本稿では、からかい行動の定義には含めないこととした。では、多様なからかい行動の解釈はどのような要因によって決定するの

であろうか。

相互作用におけるからかい行動の解釈

オフレコード・マーカによって遊戯性が示唆されたとしても、それは必ずしもからかい行動が遊戯的に解釈されることを保証しているわけではない。たとえば、Keltner et al. (1998) は、恋愛パートナー (romantic partner) を対象とした研究の中で、オフレコード・マーカの少ない挑発は、怒りや軽蔑といったネガティブな感情を引き起こしやすく、楽しみや愛情といったポジティブな感情を引き起こしにくいことを明らかにしている。このことは、オフレコード・マーカによって遊戯性が明確に示されているのであれば、相手はからかい行動を遊戯的に解釈しやすいであろうが、反対に遊戯性が曖昧であれば、からかい行動を攻撃として解釈してしまうことを示唆している。

一方、オフレコード・マーカがはっきりとしている場合であっても、受け手がオフレコード・マーカに気づき、それによって提示される情報を読み取ることができなければ、からかい行動は受け手に攻撃的なものとして解釈されるであろう。ただし、からかい行動におけるオフレコード・マーカの理解を検討した研究は行われていないため、実証的な知見は得られていない。そこで、この点の考察については、からかい行動と同様に、行為や発言が字義通りのものではないことを示すためにオフレコード・マーカが用いられる戦いごっこ (play fighting) や皮肉 (irony)、いやみ (sarcasm) に関する研究を参考にする。

Boulton (1993) は、戦いごっこが録画された場面と本当の攻撃が録画された場面とを小学生に提示したところ、8歳児は戦いごっこ攻撃とを見分けることができるものの、その判断には一貫性がなかったり、自分の判断に対して明確に説明できなかったりした。つまり、8歳児は、戦いごっこか本当の攻撃かを判断する際、オフレコード・マーカを手がかりとして効率的に利用できないことが示唆される。また、皮肉やいやみの理解に関して、6歳児は目立ったオフレコード・マーカであれば特定することができ、真のコミュニケーションとは異なる皮肉やいやみの発話を認識し始めるが、文字通りに解釈する傾向にある (Becker, 1994; Demorest, Meyer, Phelps, Garner, & Winner, 1984)。そして、11~13歳になると、皮肉やいやみの意味や目的を完全に理解できるようになるとい (Demorest et al., 1984; Dews & Winner, 1997)。

これらのことから、オフレコード・マーカの理解について、6歳ごろにはオフレコード・マーカの存

在に気づき始めるものの、実際の行為や発言との矛盾にうまく対処することができず、戦いごっこや皮肉、いやみを字義的に解釈しやすいといった可能性も示唆される。そしてその後、オフレコード・マーカに関する知識が徐々に増加し、11~13歳になるとその知識を十分に利用することができるようになると考えられる。からかい行動に関しても同様に、就学前の子どもであれば、オフレコード・マーカによって示される情報と挑発行為によって示される意味とを統合することは困難であり、挑発行為が示す攻撃の意味をからかい行動の意味として解釈してしまう可能性が推測できる。

さらに、からかい行動の解釈に影響を及ぼす要因として、オフレコード・マーカの理解だけでなく、行為の背後にある他者の意図を読み取る能力も重要と考えられる。他者の心的状態に関する理解について、心の理論研究では、4, 5歳ごろになると他者の意図理解が可能になるといわれている (Wimmer & Perner, 1983)。ただし、この時期に理解ができるようになるのは一次的意図 (first-order intention) と呼ばれるもので、行為そのものが主体の意図に基づいたものかどうかの区別ができるようになるだけである。からかい行動に見られる意図とは二次的意図 (second-order intention) と呼ばれるもので、この二次的意図の理解には、行為が相手に〇〇と思わせようと思図されたものかどうかの判断が必要になる。このような二次的な心的状態は8歳ごろに理解できるようになることが知られている (Winner & Leekam, 1991)。このことから、からかい行動の背後にあるからかい手の意図を正確に読み取ることができるようになるのは8歳ごろであることが推測される。

以上、オフレコード・マーカに関する研究や心の理論研究より考えると、からかい行動の解釈は、次のように発達するはずである。すなわち、オフレコード・マーカを適切に利用できず、他者の意図を読み取ることが困難な5歳以下の子どもにとって、からかい行動を遊戯的に解釈することは難しいが、オフレコード・マーカの知識が増加し、他者の意図理解も可能になる8歳ごろには、からかい行動を遊戯的に解釈できるようになる。しかし、たとえば、母子の相互作用におけるからかい行動を観察した研究では、母親の示したからかい行動を1歳の子どもが遊戯的に解釈するという事例 (e.g., Reddy, 1991) が報告されていることなどを考えると、からかい行動の遊戯的解釈には、受け手のオフレコード・マーカの理解、あるいは他者の意図理解という認知的側面のみが影響しているわけではないようである。では、からかい行動の解釈には、

その他に何が影響を与えているのであろうか。

からかい行動の解釈に影響を及ぼす要因について考えるにあたり、Abrahams(1962)のダズンズ (the dozens)に関する研究が示唆を与える。ダズンズとは、黒人の子どものゲームで、相手の母親を侮辱する言葉の優劣を競うものであるが、相手を傷つけるかもしれない言葉を一種の遊びとして交わすという点では挑発性と遊戯性を含んでおり、からかい行動と類似しているといえる。Abrahams(1962)によると、このダズンズは親しい友人間でしか生じないことが報告されている。つまり、親しい友人からのダズンズは遊びとして解釈されるため、親密度の高い友人どうしの間で見られ、反対に、あまり親しくない人からのダズンズは単なる悪口としてしか受け取られないため、親密ではない二者間で生じることは少ないのであろう。このことから、ダズンズと同様にからかい行動においても、からかい手と受け手の関係性がからかい行動の解釈に影響を与えていると考えられる。発話解釈というものが発話されたときの状況や文脈や文化的背景も含めて行なわれるとする語用論の立場においても、話し手と聞き手との関係の重要性が指摘されている (秦野, 1998)。文脈とは「話し手と聞き手の間で共有されている知識や信念」のようにあらかじめ定められているものではなく、聞き手が能動的に決めていくものであり (Sperber & Wilson, 1986/1993)、話し手に対して聞き手がどのような期待をもっているかで発話解釈は異なるという (Schank, 1990/1996)。つまり、話し手があまり親しくない人のときに比べ、親しい人の場合のほうが友好的な期待を抱きやすいため、たとえ発話内容が同じであったとしても、親密な他者による発話のほうがポジティブに解釈されやすいということである。乳児が母親からのからかい行動を遊戯的に解釈するのも、乳児にとっての母親は信頼できる他者であり、自らに愛情を注いでくれる他者であるため、文字通りの攻撃をしてくるとは考えもせず、何か楽しいことをしてくれることを期待しているからであろう。

からかい行動が生じる文脈

からかい行動はどのような文脈で生じやすいのであろうか。からかい行動の前兆となる状況を検討した体系的な研究は見られないが、社会的相互作用の観察研究などから、Keltner, Capps, King, Young, & Heerey (2001) は、からかい行動は規範からの逸脱 (norm deviation) や対人葛藤 (interpersonal conflict) と関連して生じることを指摘している。たとえば、規範からの逸脱に関して、小学生の遊び場を観察した

Voss(1997)は、ゲームのルールを守らないときからからかい行動が見られることを明らかにしている。また、母子相互作用の研究からは、子どもが物を独り占めしたり、わがままを言ったりした場合に、親によるからかい行動が見られることが報告されている(e.g., Dunn & Brown, 1994; Miller, 1986)。つまり、からかい行動によって、遊びのルールや母親との約束事といった規範からの逸脱行為の制止や修正を相手に求めているといえる。さらに、からかい行動は直接的な要求とは異なり遊戯的なオフレコード・マーカーが随伴するため、相手が不満や不快な状態に陥るという危険性は低くなっている(中野, 1993)。これらのことから、からかい行動には他者の行動を温和的にコントロールする機能があることが示唆される。

また、からかい行動と対人葛藤との関連について、乳幼児のいる家庭では葛藤とともにからかい行動が頻繁に見られることが報告されており(Dunn & Munn, 1985)。からかい行動には葛藤を調停する作用があると考えられている(Eder, 1993; Eisenberg & Garvey, 1981)。しかし、これまでの研究によって明らかにされているのは相関関係であり、因果関係の検討は十分には行われていない。対人葛藤によってからかい行動が引き起こされるのか、反対にからかい行動によって対人葛藤が生じるのか、あるいはからかい行動が対人葛藤の解決方略として用いられることもあるのか、葛藤をもたらすこともあるのか、今後の検討が必要であろう。

からかい行動と当事者間の関係性

先述のように、からかい行動は対人葛藤と関連して生じやすいことが明らかにされている。対人葛藤場面とは、当事者にとってお互いの関係が崩壊の危機にさらされている状況といえる。そのような対人葛藤と関連して見られるということは、からかい手はからかい行動を用いることで、その葛藤状況の回避や解決を試みている可能性がある。つまり、相手との関係を調節するためにからかい行動が用いられていると推測できる。このように、からかい行動は他者との関係性の変化と密接に関わっていると考えられる。

たとえば、母子相互作用においてからかい行動が見られるように(Reddy, 1991)、すでに形成されている親密な関係性が土台となって、からかい行動が生じることもあるであろう。この場合、受け手がからかい手に対して「何か楽しいことをしてくれる存在」と期待することで、からかい行動を遊戯的に解釈するようになり、その結果、からかい行動が頻繁に見られるよう

になると考えられる。

しかし、からかい行動は親密な関係性に支えられたものばかりではないように思われる。からかい行動とは、受け手が解釈することによって初めて、その場面での意味が決定されるため、からかい手が行為する時点では意味の定まっていなかった行為といえる。このように、相手に受け止めてもらって初めてその場面における意味が発生するという行為の特徴を岡田(2001)は「行為の意味の不定性」と呼んでいる。そして、行為そのものの意味が定まっていなかった働きかけを他者に行い、相手に受け止めてもらうことで「相手に支えてもらった」という安堵感を得るといえる(岡田, 2001)。つまり、意味の不定性という特徴を含んだからかい行動を他者に投げかけることによって、相手に受け止めてもらえるかどうか、相手に受け入れてもらっているかどうか、相手との関係性を確認しているというのである。この場合のからかい行動であれば、親しい相手というよりも、これから関係を築いていこうとしている相手や、仲よくなりたい相手に対して行なわれ、それをきっかけとして関係性が深まっていくのではないかと考えられる。しかし、これまでのところ、からかい行動と当事者の関係性の変化との関連に注目した研究は行なわれておらず、今後の検討が必要であろう。

今後の研究の課題

本レビューでは、からかい行動に関するいくつかの先行研究を参考に、からかい行動を「遊戯的なオフレコード・マーカーを伴った挑発行為」と定義し、からかい行動の解釈に影響を及ぼす要因、からかい行動が生じやすい状況について論じてきた。

からかい行動の解釈においては、オフレコード・マーカーの理解(e.g., Boulton, 1993; Demorest et al., 1984)や他者の意図理解(e.g., Winner & Leekam, 1991)といった受け手の認知的能力が重要であることが指摘されている。そのため、認知能力が発達途中の幼児であれば、オフレコード・マーカーが提示する情報やからかい手の意図を読み取ることが困難なため、からかい行動を敵意的に解釈しやすいことが推測された。しかし、1歳の子どもが、母親からのからかい行動に対して遊戯的な反応を示す報告(Reddy, 1991)などを踏まえると、からかい行動の遊戯的な解釈に必要なのは認知的能力だけではないと考えられた。発話解釈における文脈の重要性を強調する語用論では、受け手が抱いているからかい手に対するイメージが発話の解釈に影響を及ぼすことが指摘されていることから、今後、両者の関係性とからかい行動の解釈との関係を

考慮した検討が必要であろう。

また、からかい行動が生じやすい文脈については、からかい行動と文脈とを直接検討した研究は見られないが、社会的相互作用に関する研究から示唆が得られた。からかい行動は、社会的な決まりごとや遊びのルールといった規範からの逸脱が見られた際に生じやすいことや、対人葛藤と関連して見られることが確認されている (Keltner et al., 2001)。このことから、からかい行動には他者の行動をコントロールしたり、他者との関係を調節したりする働きがあることが示唆されるが、からかい行動の機能に焦点を当てた研究は行なわれていないため、実証的なデータは得られていない。そのため、社会的相互作用におけるからかい行動の機能を実証的に明らかにする必要があるであろう。また、からかい行動には他者との関係を調整する機能があると考えられることから、他者との関係の深さによって、使用されるからかい行動がどのように異なるのかなど、からかい行動と当事者間の関係性との関連を明らかにする研究も必要であろう。

さらに、これまでのからかい行動に関する研究、およびそれに関連する研究では、乳児と母親 (Reddy, 1991)、小学生以上の友だちどうし (Voss, 1997; Abrahams, 1962)、恋人どうし (Straehle, 1993) のやりとりが扱われてきたが、幼児どうしの相互作用に焦点を当てた研究は行なわれていない。つまり、幼児のからかい行動については十分に検討されていない。そのため、今後は幼児どうしのやりとりにおけるからかい行動を対象とした研究も必要であろう。

以上の点から、からかい行動に関する研究の今後の方向性の1つとして、幼児期におけるからかい行動を検討することが重要であろう。幼児期はオフレコード・マーカ―や他者の意図を読み取る上で必要とされる認知能力が発達する時期である。また、多くの幼児にとって、幼稚園や保育所は同年齢の子どもたちと共に生活する最初の場となるため、仲間との関係を築いたり、その関係を深めたり、逆に関係性の危機を体験したりと、関係性のダイナミックな変化が見られる時期でもある。そのため、幼児期のからかい行動への注目は、これまでの研究では十分に検討されてこなかったからかい行動と認知能力との関連、さらには、からかい行動と当事者間の関係性との関連などについて新たな知見が得られるのではないかと考えられる。今後、からかい行動をより包括的に理解するために、幼児におけるからかい行動に関する研究は重要な分野となりうるであろう。

引用文献

- Abrahams, R. D. (1962). Playing the dozens. *Journal of American Folklore*, 75, 209-220.
- Alberts, J. K. (1992). An inferential/strategic explanation for the social organization of teases. *Journal of Language and Social Psychology*, 11, 153-177.
- Betcher, R. W. (1981). Intimate play and marital adaptation. *Psychiatry*, 44, 13-33.
- Becker, J. (1994). Pragmatic socialization: Parental input to preschoolers. *Discourse Processes*, 17, 138-148.
- Boulton, M. (1993). Children's abilities to distinguish between playful and aggressive fighting: A developmental perspective. *British Journal of Developmental Psychology*, 11, 249-263.
- Boulton, M. & Hawker, D. (1997). Verbal bullying: The myth of "sticks and stones." In D. Tattum & G. Herbert (Eds.), *Bullying: Home, school, and community* (pp.53-63). London: David Fulton.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- Corsaro, W. A. & Maynard, D. W. (1996). Format tying in discussion and argumentation among Italian and American children. In D. I. Slobin, J. Gerhardt, A. Kyratzis, & J. Guo (Eds.), *Social interaction, social context, and language* (pp.157-174). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Demorest, A., Meyer, C., Phelps, E., Garner, H., & Winner, E. (1984). Words speak louder than actions: Understanding deliberately false remarks. *Child Development*, 55, 1527-1534.
- Dews, S. & Winner, E. (1997). Attributing meaning to deliberately false utterances: The case of irony. In C. Mandell & A. MaCabe (Eds.), *The problem of meaning: Behavioral and cognitive perspectives* (pp.377-414). New York: Elsevier Science.
- Drew, P. (1987). Po-faced receipts of teases. *Linguistics*, 25, 219-253.
- Dunn, J. & Brown, J. (1994). Affect expression in the family, children's understanding of emotions, and their interactions with others. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40, 120-137.
- Dunn, J. & Munn, P. (1985). Becoming a family member: Family conflict and the development of

- social understanding in the second year. *Child Development*, **56**, 480-492.
- Eder, D. (1993). "Go get ya a French!" Romantic and sexual teasing among adolescent girls. In D. Tannen (Ed.), *Gender and conversational interaction* (pp.7-31). New York: Oxford University Press.
- Eisenberg, A. R. (1986). Teasing: verbal play in two mexican homes. In B. Schieffelin, & E. Ochs (Eds.), *Studies in the social and cultural foundations of language: Vol. 3. Language, socialization across cultures* (pp.182-198). New York: Cambridge University Press.
- Eisenberg, A. & Garvey, C. (1981). Children's use of verbal strategies in resolving conflicts. *Discourse Processes*, **4**, 149-170.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. Garden City, NY: Anchor.
- Goffman, E. (1971). *Relations in public: Microstudies of the public order*. New York: Anchor.
- 秦野悦子. (1998). 会話が成立するときしないとき. 秦野悦子・やまだようこ (編), *発達と障害を探る: 1 コミュニケーションという謎* (pp.129-150). 京都: ミネルヴァ書房.
- Hopper, R., Knapp, M. L., & Scott, L. (1981). Couple's personal idioms: Exploring intimate talk. *Journal of Communication*, **31**, 23-33.
- Keltner, D. & Bonanno, G. (1997). A study of laughter and dissociation: Distinct correlates of laughter and smiling during bereavement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 687-702.
- Keltner, D., Capps, L., King, A. M., Young, R. C., & Heerey, E. A. (2001). Just teasing: A conceptual analysis and empirical review. *Psychological Bulletin*, **127**, 229-248.
- Keltner, D., Young, R. C., Heerey, E. A., Oeming, C., & Monarch, N. D. (1998). Teasing in hierarchical and intimate relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1231-1247.
- Miller, P. (1986). Teasing as language socialization and verbal play in a White working class community. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Studies in the social and cultural foundations of language: Vol. 3. Language socialization across cultures* (pp.199-212). New York: Cambridge University Press.
- Moore, M. M. (1995). Courtship signaling and adolescents: "Girls just wanna have fun?". *The Journal of Sex Research*, **32**, 319-328.
- Morgan, M. (1996). Conversational signifying. In E. Ochs, E. Schegloff, & S. Thompson (Eds.), *Interaction and grammar* (pp.405-434). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 中野 茂. (1996). 遊び研究の潮流. 高橋たまき・中沢和子・森上史朗 (編). *遊びの発達学: 基礎編* (pp.21-60). 東京: 培風館.
- 岡田美智男. (2001). 社会的な相互行為とそのリアリティを支えるもの. 岡田美智男・三嶋博之・佐々木正人 (編), *身体性とコンピュータ* (pp.220-232). 東京: 共立出版.
- Reddy, V. (1991). Playing with others' expectations: Teasing and mucking about in the first year. In A. Whiten (Ed.), *Natural theories of mind: Evolution, development, and simulation of everyday mindreading* (pp.143-158). Oxford, England: Blackwell.
- Schank, R. C. (1996). 人はなぜ話すのか: 知能と記憶のメカニズム (長尾 確・長尾加寿恵, 訳). 東京: 白揚社. (Schank, R. C. (1990). *Tell me a story: A new look at real and artificial memory*. Macmillan Publishing Company.)
- Schieffelin, B. B. (1986). Teasing and shaming in Kaluli children's interactions. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Studies in the social and cultural foundations of language: Vol. 3. Language socialization across cultures* (pp.165-181). New York: Cambridge University Press.
- Shapiro, J. P., Baumeister, R. F., & Kessler, J. W. (1991). A three component model of children's teasing: Aggression, humor, and ambiguity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **10**, 450-472.
- 白石正久. (1994). *発達障害論*. 京都: かもがわ出版.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1993). 関連性理論: 伝達と認知 (内田聖二・宋 南先・中達 俊明・田中圭子, 訳). 東京: 研究社出版. (Sperber, D. & Wilson, D. (1986). *Relevance: Communication and cognition*. Cambridge: Harvard University Press.)
- Straehle, C. A. (1993). "Samuel?" "Yes, Dear?" Teasing and conversational rapport. In D. Tannen (Ed.), *Gender and conversational interaction: Oxford studies in sociolinguistics* (pp.210-230). New York: Oxford University Press.
- 杉山登志郎 (1990). 自閉症: 最近の研究の進歩. *精神科治療学*, **5**, 1505-1515.
- Voss, L. S. (1997). Teasing, disputing, and playing:

- Cross-gender interactions and space utilization among first and third-graders. *Gender and Society*, **11**, 238-256.
- Wimmer, H., & Perner, J., (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.
- Winner, E., & Leekam, S. (1991). Distinguishing irony from deception: Understanding the speaker's second-order intention. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 257-290.

(主任指導教員 湯澤正通)